Ⅳ　家庭　３年次の成果と課題

１　成果

(1)　多様な価値観を認め，判断し，選択・決定する学習場面を位置付けた題材構成

家庭科の学習において基本的な知識及び技能を身に付けておくことは，よりよい生活を工夫する上で不可欠である。そのために，生活経験や他教科における既習内容と関連付けたり，根拠をもって考えることができるように実験や実習などの体験的な学習を題材構成に位置付けたりした。子どもの生活の実態から課題を設定し，その課題解決のために実験や実習を行った。それにより体験的な学びから実感を伴って得られた知識が，選択・決定のための判断材料となった。さらに学習で得た知識によって裏付けられ，説得力のある対話につながった。また，生活に生かすという視点から，より自分の生活に引き寄せて課題を解決できるように具体的な場面を設定した。その結果，例えば気温だけに着目して着方を考えていた子どもが，場所や活動内容，気候にも目を向けて考えをもつことにつながった。具体的な場面の設定は，身に付けた知識や技能を発揮して考える場になった。また，実験等の体験的な学びによって得た知識を根拠として，また一人一人の判断内容を伝え合い，比較することで，自分の考えを深める学びの過程は，課題解決に向けての主体性を引き出すことにも有効であったといえる。

(2)　学びの自覚と根拠をもって対話し，よりよい生活のために判断する省察場面の工夫

生活の中から見いだした課題の解決に向けて，何を根拠として自分の考えとするのか。その判断は生活経験や学習による知識に裏付けられる。家庭によって異なる生活経験や，習慣化され問題意識の低いものがあることから，実験や実習の方法と記録の仕方を工夫した。４種類の素材における吸水性や通気性の検証，綿の手袋とビニール手袋を用いた下着の効果，襟や袖口，裾の開閉による衣服内の温度の比較実験を取り入れ，数値や事象に着目した比較・検討ができるようにした。比較対象があることで，「綿とポリエステルを比べるとポリエステルの方が乾きやすかった」「綿の手袋をした方がしていない方に比べてさらさらしていて快適に感じた」などのように実験結果を根拠として対話する姿につながった。また，実習などの体験的な活動の中での気付きを省察に生かす手立てとして，グループで役割を分担し，実験を行いながらその様子を動画で撮影しつつ実況し，同時にホワイトボードへの記録も行った。動画を撮影しながら実況するという記録方法は，その場での気付きを自覚しながら言語化することができ，有効であったといえる。

２　課題　体験的な活動を評価・改善することによる，家庭での実践に生きる省察の在り方

家庭科の学習では調理や製作等の実習や観察，調査，実験などの実践的・体験的な活動を通して，実感を伴って理解させることが求められる。動画やホワイトボードを用いてリアルタイムに記録することにより，体験的な活動の中で生まれた気付きや考えを，活動後の省察の場に生かすことができた。しかし，体験したことや記録された映像が強い印象を与えることで，見方・考え方が一方向のみになってしまいがちで，柔軟で多面的な見方につながったとは言えない。日常生活においては「快適さ」だけではなく「健康」「安全性」「経済」「環境」など様々な見方が必要であり，それらに子ども自身が気付き，よりよい生活のためにはどの見方を優先する必要があるのかを意識できるような手立てを工夫し，家庭での実践に生かすことのできる省察の在り方を探っていきたい。